



### 国際原子力機関（IAEA）保障措置シンポジウムへの 参加報告（2）

核物質管理センター 企画室

当センターから参加した職員は5件の論文発表を行うとともに、保障措置に関する動向を調査しました<sup>1</sup>。以下に、IAEAのウェブサイト公表された情報に基づき、当センター職員による論文発表の概要を紹介いたします。

#### 1. バルク施設における廃止措置手順の提案<sup>2</sup> 【NEW-S4】

(1) 著者：渡邊 聡<sup>3</sup>、熊倉 信一、西尾 祥平、  
加藤 貴之、谷口 泰紀

(2) 論文要旨：

耐用年数を迎える原子力施設は、そう遠くない将来に、施設としての寿命の最後の段階に移行し、廃止措置の手続が必要になる。IAEAは、保障措置協定の追加議定書の下で、こうした施設の廃止措置の状態を確認するための権利と義務を有している。

しかし、こうした施設に対する確認手法が確立されておらず、現在もお議論されているところである。保障措置協定とその追加議定書は、次のとおりIAEAが2つの条件を確認しなければならないことを規定している。

- 1) 全ての核物質が施設から除去されていること（核物質の存在を無くすこと）
- 2) 施設にとっての本質的な機能を果たす全ての機器が施設から取り除かれているか、あるいは使用不能と判断されるレベルまで解体又は破壊されていること（施設の運転に必要な機器が全て取り除かれて使用不能になること）

バルク施設において運転期間中に実在庫確認を行うにあたり、施設にある核物質は可能な限り工程から回収されるが、ある程度の量が残差として保持されてしまうことがある。通常、これらの核物質は回収された際に負のMUFとして現れ、施設の操業期間を通じて積み重なった累積MUFの

#### 目次

●国際原子力機関（IAEA）保障措置シンポジウムへの参加報告（2）	1
●イランにおける国際原子力機関（IAEA）の検認及び監視活動状況について	6
●国際原子力機関（IAEA）における2018年ハイライトの概要	12
●動静	16

<sup>1</sup> このほか、磯章子による女性パネルへの参加については本誌2019年1月号（Vol.48 No.1）を参照されたい。

<sup>2</sup> 原題は、「A Proposal of Decommissioning Procedures」

<sup>3</sup> 本稿ではファーストオーサー（筆頭著者）に下線を施した。以下同様。

## 動 静\*

2019.3.4～8 IAEA理事会(オーストリア、ウィーン)  
2018.5.6～10 IAEA理事会/事業計画・予算委員会  
(オーストリア、ウィーン)  
2019.6.10～14 IAEA理事会(オーストリア、ウィーン)  
2019.6.17～18 CTBT準備委員会第52会期(オースト  
リア、ウィーン)  
2019.6.24～28 使用済燃料管理に関する国際会議(オー

ストリア、ウィーン)  
2019.9.9～13 IAEA理事会  
2019.9.16～20 第63回IAEA総会  
2019.9.23 IAEA理事会  
2019.11.18～22 IAEA理事会  
2019.11.25～27 CTBT準備委員会第53会期(オースト  
リア、ウィーン)

\*ここに掲載している会合等は必ずしも全てが公開参加型とは限らないことをお断りします。また、2か月先までのスケジュールについて網カケ表示しています。



編集後記

数年前、足かけ5年で、日本橋から仙台までの奥州道中約370kmを徒歩で旅しました。福島県白河市から桑折町まで約100kmを北上する中、その大半の道のりで絶えず目にしたのは安達太良山でした。安達太良山(5つの山頂からなる山の総称で、最高峰は箕輪山の1,728m。主峰安達太良山は1,699m)はどっしりとした存在感の大きな山です。



国道4号線の路傍から  
安達太良山を望む

安達太良山から連想されるのは高村光太郎(1883～1956年)が妻・智恵子(1886～1938年)を詠った詩。「あれが阿多多羅山 あの光るのが阿武隈川」(「樹下の二人」より)や、「阿多多羅山の山の上に 毎日出ている青い空が 智恵子のほんとの空だという」(「あどけない話」より)という有名なフレーズが、道中、何度も脳裏をよぎりました。安達太良山麓の二本松市に生まれ育った智恵子にとって、安達太良山の悠然とした山容が目映らない東京での暮らしは心もとなささ呼び起こしたのではないかと想像しました。さらに福島で今日を生きる人にとっても、あるいは故郷を離れた人にとっても、安達太良山は心の風景にならざるを得ない、改めて思ったものでした。また、「あの光るのが阿武隈川」というフレーズからは、遙かに見える福島の大地を流れる川がきらりと光を反射させる一瞬を感じました。

光るものといえば。福島県の玄関先である白河は旅の中で「きらり」と光るものを感じさせてくれた町でした。白河は幕末の戊辰戦争の激戦地と

なったところで、その際に小峰城と呼ばれる白河藩の城が焼失しました。今日私たちが知っている小峰城は1632年に丹羽長重(織田家家臣・長秀の子。1571～1637年)が築城した



小峰城  
(福島県観光物産交流協会  
ウェブサイトより)

城を復元したものです。1991年(平成3年)に再建されました。ところが、2010年(平成22年)8月5日に国の史跡に指定されてほどなく、翌年の3月11日に発生した東日本大地震で石垣が崩落。2014年(平成26年)1月から白河市が進めてきた修復工事は、2018年(平成30年)12月現在、全体の70%まで完了したと、市のウェブサイトが報告しています。

白河市には小峰城のほか南湖公園など国・県・市指定の有形・無形文化財が数多くあります。そのところどころに見出されるのが松平定信(1759～1829年)の名前です。幕府の老中・田沼意次(1719～1788年)の金満政治(昨今ではその評価は変わってきています)がもたらした財政難を再建すべく幕府の老中として職務に邁進しますが(寛政の改革と呼ばれます)、6年で失脚。その後、定信は白河藩の政務に専念したそうです。今日の白河市の街並からは、松平定信という人物が取り組んだ白河藩の「まちづくり」の遺産が随所に感じられました。空気の透明感と町中を流れる川の清らかさを湛えた町並みに風光明媚という言葉が重なり、清々しい気持ちになったものです。

平成に次ぐ新しい時代を迎えるにあたり、東北地方にも新しい風が吹くことを祈っています。(企